

2009年8月6日 現地演習

村落フィールドワーク：世帯の暮らしから村を見る（8月6日）

村で迎える初めての朝は、冷水での水浴（マンディ）に始まった。日中はかなり気温が上がるものの、まだ太陽も昇らぬ早朝の水浴は、「えいっ」と気合を入れてかからなければならない。しかしながら、一度慣れてしまうとこれなしには1日が始まらなくなるから不思議である。

この日は、終日ホストファミリーと過ごす予定だったので、お父さんと末娘と3人で散歩に出かけた。私はインドネシア語がさっぱり出来ないため、説明してくれるものをデジカメで撮影し、フィールドノートに名前を書いて貰って覚えることにした。庭の木も、道端の木も、食用であったり薬になったりするものばかりで、無駄なものは1つもないようだ。それ以上に、村の人々がこんなにも沢山の植物の種類を知っていることに驚いた。実家の庭に植えてある木の名前も知らない自分が、何だか恥ずかしく思えた。

散歩から戻ると、親戚らしい人たちが集まっており、手を引かれるままに畑へ。「日本人に唐辛子植えを体験させてやろう！」とお父さんが自ら準備してくれたものらしい。唐辛子は、インドネシアでの食事に欠かせないサンバルの材料にもなる「ソウルフード」と言っても過言ではないものである。先生方やインドネシア人スタッフ達に見守られながら15分ほど植え付け終了。これ以降、毎朝の散歩を兼ねて唐辛子の生長を見守るのが私の日課となった。

夕方からは、丸1日を村で過ごした後の驚きや疑問、発見などを発表し、皆で共有しあおうと報告会が行われた。目を向けるところがそれぞれ違って、他の学生の発表が刺激になったとともに、日本人だけでなくインドネシア人スタッフもセッションに参加したので、より議論が盛り上がった。この勢いを落とさず、さらに疑問や発見を重ねながら報告会で出された点についても追求していけたらと思った。

（記録：竹口美久）